

GRAHAM GREENE

20世紀英米文学案内 24

Graham Greene

グレアム・グリーン

青木雄造 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 24

グレアム・グリーン



KENKYUSHA

1971 年 8 月 10 日 初版発行

1979 年 2 月 25 日 4 版発行

編 者 青 木 雄 造

発行者 近 藤 繁

印刷者 青 柳 義 男

発行所 研究社出版株式会社

162 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

電話 東京 (269) 4521-5 番

振替口座 東京 7-83761 番

印刷 研究社印刷

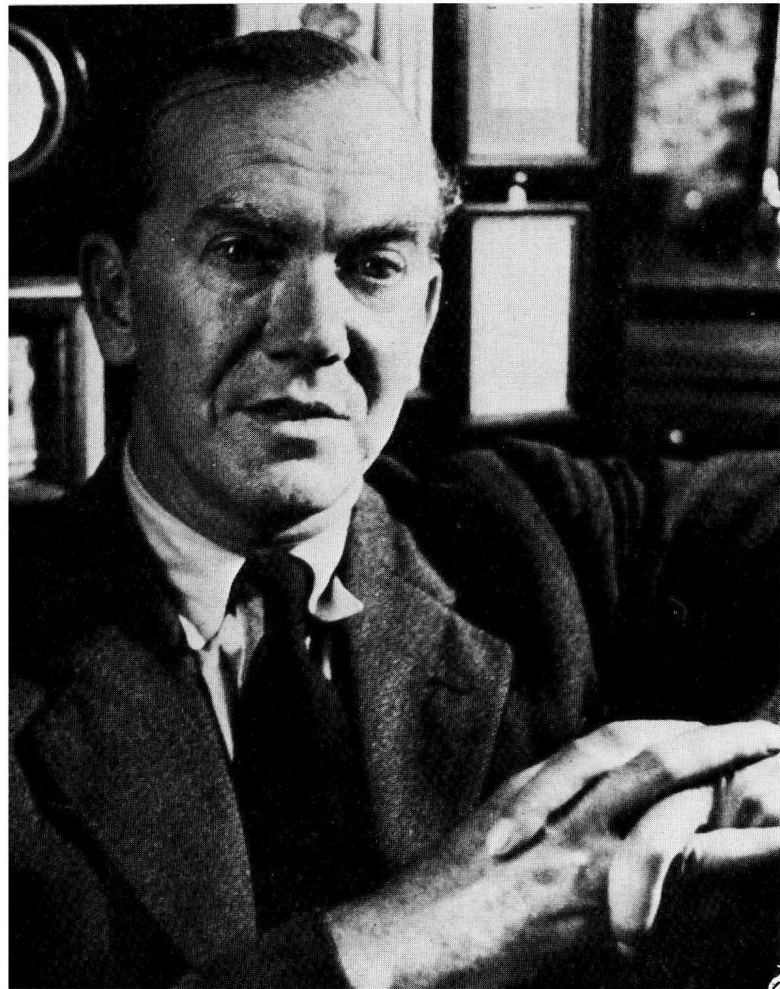
美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

1398-105024-1860



日常のグレアム・グリーン

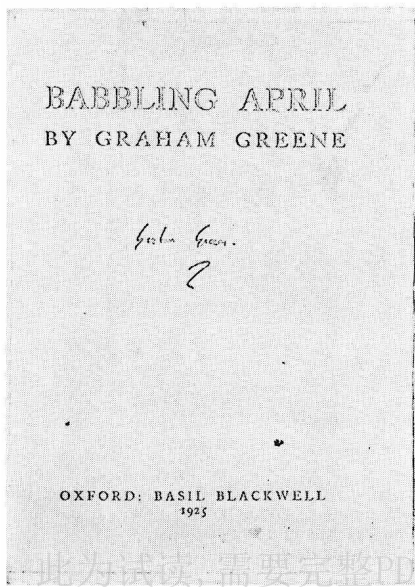


文壇登場のころ



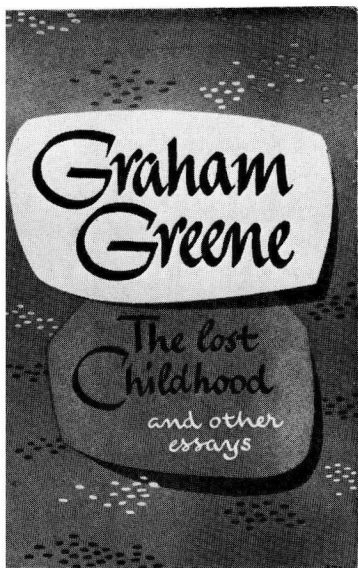
ノッティンガム市の目抜き通り

『おしゃべりする四月』扉 (自署)

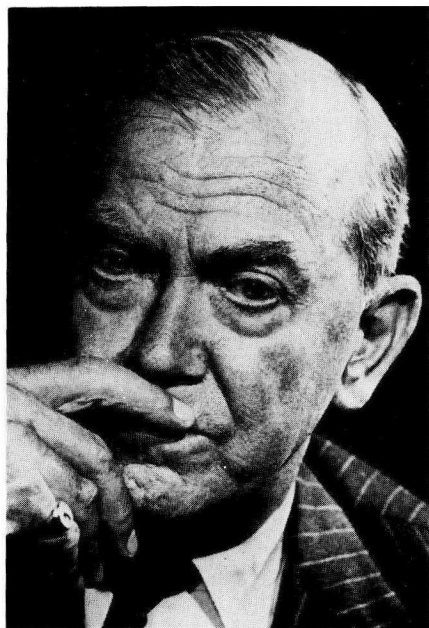


1940年代のグリーン



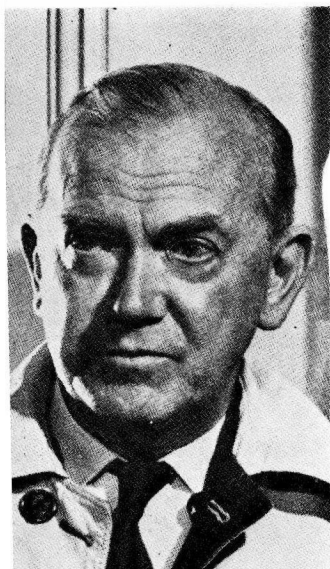


『失われた幼年時代』 ラパー



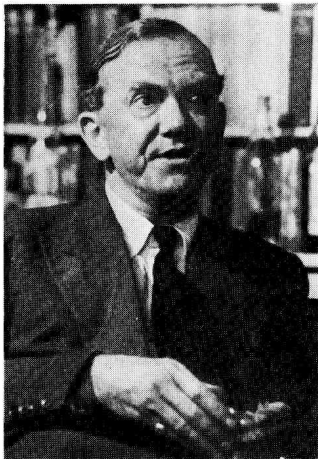
旅行中のグリーン

流行作家時代

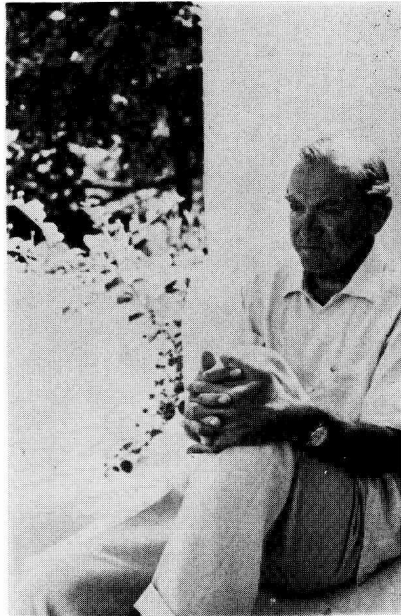


映画『第三の男』より (左コットン、右ウェルズ)





書齋にて



最近のグリーン

『庭の小屋』ニューヨーク初演の舞台写真



目 次

人 と 生 涯 / 青木雄造・小池 滋	1
---------------------	---

作 品

『内なる私』 / 高見幸郎	28
『ここは戦場だ』 / 伊藤欣二	41
『イギリスが私をつくった』 / 井出弘之	48
『ブライトン・ロック』 / 巽 豊彦	58
『力と栄光』 / 巽 豊彦	72
『事件の核心』 / 前川祐一	89
『恐怖省』 / 前川祐一	106
『情事の終り』 / 道家弘一郎	122
『イスタンブール特急』 / 小池 滋	135
『拳銃売ります』 / 小池 滋	143
『密使』 / 小池 滋	153

『第三の男』 / 小田島雄志	160
中・短編 / 前川祐一	165
『二一の短編』『現実的感覚』『御亭主をちょっと拝 借、その他性生活にまつわる喜劇』	
詩 / 出淵 博	214
劇 / 小田島雄志	225
『居間』『庭の小屋』『愛想のいい恋人』『彫像』	
『地図のない旅』 / 道家弘一郎	241
評 価 / 高見幸郎	251
年 表 / 前川祐一・高見幸郎	巻末 1
書 誌 / 高見幸郎	巻末 9
書誌追加	(1)
索 引	巻末 34

人と生涯

生 立 ち

グレアム・グリーンは一九〇四年一〇月二日にイングランドのハーフォード(Hertford)州バーカムステッド(Berkhamstead)で生まれた。ここはロンドンから二七マイル、現在人口一万余の町だが、一一世紀にウィリアム征服王がいたことのある城の遺跡や、一六世紀中頃に創立された学校があり、後者はその後バブリック・スクールになり、グリーンの生涯に對してもっとも深甚な影響を及ぼすことになった。グリーンの父はチャールズ・ヘンリー・グリーン(Charles Henry Greene)といい、ここに当たるメアリアン・レイモンド・グリーン(Marianne Raymond Greene)と結婚して、グレアムの兄弟には外国通信員や外科医として、それぞれ名を成した者がいる。また彼の親類筋には、『宝島』(Treasure Island)と『ジェキル博士とハイド氏』(Dr Jekyll and Mr Hyde)の作者ステイヴンソン(R. L. Stevenson)と、狩獵や軍隊生活を扱った小説で聞こえたジョージ・ワイト＝メルヴィル(George

Whyte-Melville, 1821-78) がいた。

グリーンの父はバーカムステッドのバブリック・スクールの校長であつたから、彼の一家は学校の寄宿舎の中に住んでいた。母親の寢室の窓から外を眺めると、校庭や講堂やチャペルや教室が見え、父の書斎のわきの廊下にある、緑色のラシャを張ったドアを出ると、そこにも同じ作りの廊下が並行していたが、ここはもう本来の寄宿舎の領域で、舎監の部屋や更衣室が並んでいた。やがてグリーンは父の学校で学ぶようになり、土曜日と日曜日の午後は家庭で、その他の日々は学校で過ごすことになったが、学校と家庭とがどんなに大きな相違を持っているかを悟るにつれて、いわば、この二つのまったく異なつた國が境を接している環境の中で幼年時代を送つたことが、グリーンの人間および作家としての形成に決定的な意味を持つようになる。

グリーンは父が校長をしているバーカムステッド・スクールへ通学するようになったが、同じ構内にありながら、この学校という新しい世界が、それまで自分の育つて来た、温かい静かな家庭とまったく違ふこと

を知って、幼いグリーンは強烈なショックを受けた。みなをコンパスで突き刺す生徒、埃まみれのガウンをつけ、ものすごいあごが三重にくびれ、悪魔のようにみだらな感じのする先生、「芸術写真」のちいさな広告を机いっぱい溜めこんでいる生徒、片時も静かになることのない、寄宿舎の寝室、錠のない便所——こういった学校を、一三歳のグリーンがどのように受けたか、後年グリーンは次のように要約している。

摩天楼のような校舎と、石の階段、朝早くから鳴る、ひび割れた鐘の国にはいると、人は恐怖と憎悪、いわば一種の無秩序が存在していることに気づいた——そこではぞつとするような残酷な行ないが無難作に行なわれ得た。人は初めて、真正正銘の悪を担った人々(大人もいたし、子供もいた)に出会った……地獄はすでに捕鯨時代に彼らの周囲に横たわっていた。『錠なき道』『プロローグ』

こういう、グリーン自身の書いた自伝的な文章を読むと、読者はバーカムステッド・スクールがいかにも類廃した雰囲気包まれていたかのような印象を受けるが、その辺はきわめて微妙である。グリーン作品をこまかに考察した著書『グレナム・グリーン』(Graham

Greene, 1957)の中でジョン・アトキンズ(John Atkins)は、グリーンが父がこの学校できわめて進歩的な教育を行なった校長であったといっているし、グリーン自身も、「私の学んだ学校は、多くの点においてずいぶん進歩的であった」ことを認めているという。この点で興味深いのは、伝記文学者として業績を残しているピーター・クエネル(Peter Quennell)の言葉である。

クエネルはグリーンとともにバーカムステッドで学んだばかりでなく、オクスフォード大学でも同じベイリオール・コレッジ(Balliol College)の同期の友人であったが、その文学的自叙伝『双魚宮』(The Sign of the Fish, 1960)で、バーカムステッド・スクールについてグリーンとは非常に異なった回想を記している。クエネル自身もこの学校を退屈に思い、その単調さに嫌悪を感じたけれども、その嫌悪感を決して罪の意識と結びつくようなものではなかったという。学校の大部分の先生たちは、おもしろくはないけれども、立派な人たちだと思われたし、グリーンに「恐怖と憎悪」や「一種の無秩序」の存在を意識させたような生徒や先生のいる学校についても、「私が学校で送った平凡な

生活に地獄のような鬱屈を感じなかった」と述べている。そしてクエネルは、グリーンと自分の人間および作家としての資質の相違を、いまさらのように感じながらも、「私の記憶のほうに、たぶん、少しばかり正確であろう」と結論する。

イギリスのパブリック・スクールといえば、「自由と紀律」を両立させつつ「イギリス紳士」を形成する教育の場として広く知られているが、教師および生徒を含めて全員寄宿制度による生活に、いろいろな弊害や悪習があったことは古くから知られている。しかし、グリーンが書いているような「残酷な行為」や「悪」は、思春期の少年たちを集めた学校においては、決してめずらしいものではない。従って、客観的に考えれば、クエネルの述べているところのほうに「正確」といってよい。むしろ、重要なことは、学校における、そのようなちいさな悪をかいま見ることによって、少年グリーンがもっと巨大な、人間性の悪を直観し、この発見が人および作家としての彼を、一度かぎり永久に決定した点にある。このことはいくら強調しても、しすぎることはあるまい。ただ、グリーンが自

分の、悪の原体験を述べている文章は、淡々として飾りけのない、単なる思い出の記といったようなものではない。それは決して「作りごと」ではないが、きわめて「小説」的に書かれているように感じられる。

これまでグリーン自身の筆になる、彼の「人と生涯」を窺_うわせるような伝記的資料はきわめて少なく、彼の二つの旅行記、『地図のない旅』(Journey Without Maps, 1936)と『徒なき道』(The Lawless Roads, 1939)。特にその中のいくつかの章および節、それからエッセイ集『失われた幼年時代、その他』(The Lost Childhood and Other Essays, 1951) および、その再版に相当する『試論集』(Collected Essays, 1969) の中の数編にすぎなかった。(一九七〇年から出版され始めた彼の「全集版」The Collected Edition の著作集の巻頭につけられている著者の序文は、今あげた自伝的文章と違って相当率直に自己を語っているし、また近く彼の自叙伝の刊行が伝えられているから、今後は伝記的資料がふえそうである。) 今あげたグリーンの伝記的資料は旅行記とエッセイ集の一部であるが、このことがそれらの文章に、ほかの多くの作家に見られ

ない特異性を与えている。すなわち、それらの自伝的記録は、彼が数十年にわたって書いて来た作品論・作家論を集めた、『失われた幼年時代』（および『試論集』）と、カトリシズムが禁圧された時代のメキシコにおける「宗教の状況についての本」である『掟なき道』においては、それぞれの「プロローグ」および「エピローグ」として巻頭および巻末に置かれており、また第二次大戦の予兆が顕著になって来た時期に、未開の暗黒大陸を旅することによって、人類の「獣性」、「残虐性」を原始の昔にまで溯^{さかのぼ}って探求しようとした『地図のない旅』では、著者がまだ乳母車に乗せられていた時代に始まる、人生の残酷さについての記憶が随所にちりばめられている。しかし、これらのどの著書においてもグリーンは自分の過去を、すでに過ぎ去ったことどもとして静かに回想しているのではなく、それぞれの著書の主題、およびその時期に自分が探求している問題と密接につながり、それらの一環をなしているものとして、自己の体験を材料に使っているのである。これらの著書においてグリーンが書いている自伝的な事柄は、一言でいえば彼の人間・芸術・宗教

に対する開眼の原体験といえるが、彼はそれを現在の時点から（つまり今あげたそれぞれの著書の執筆なし出版の時期から）跡づけて、その開眼以来、つまり彼の言葉でいえば、「失われた幼年時代」以来、終始一貫、同じ眼で人生を見、かつ生きて来たことを強調している。従って、幼い時期の自分のことを書いた文章は、どんなに短いものであっても、彼の小説作品を支配しているのと同じ統一的なテーマと構成を持つていて、それらの文章は必ずしも当時の彼をありのままに、全面的に示していないように思われる。そこに描かれている幼いグリーン像は作り物ではないが、小説化されているといえよう。グリーンの学友クエネルは次のように書いている。

その当時、グレアム・グリーンは、人々が彼の書いた回想を研究して、たぶん思い浮かべるような、悩み疲れ、恐しい思いにうなされている人物ではなかった。丈^{たけ}が高く、体つきはひよる長くてぐにやぐにやしており、皮膚はひどく青白いが、目は鋭く、快活な上に観察力に富んでいたから、一八世紀のイタリヤの即興喜劇に出て来る、やや悲しそうな仮面の下に冷笑的なユーモアを大いに発揮する能力を隠しているピエロを演じさせれば打ってつけた。た

びたび彼は溢れんばかり元氣旺盛になった。真底から陽氣になることができる人だった。それにまた、その元氣のよさ、陽氣さは消え失せてはいないのである。現在ですら、私は彼の著書——そこではあらゆる形の快樂が本来から疑わしく、あらゆる情事が不可避的に破滅し、寂しい街灯のまわりで渦巻く霧に悪の息吹きがまじっている、あの罪と苦悩の記録——を読み直してみると、ときどき私は、一層完成された、一層ものものしい仮装をつけた、あの活発な少年と向かい合っているような気がする。どうも、彼は自分と読者の間に粟を生じさせるのを、かなりおもしろがって——学校生徒らしく氣樂におもしろがっていて、自分がかくも非凡な手腕をもって喚起する嫌悪感、恐怖感を半ば楽しんでいのではないか、という疑いを私は禁じえない。

『双魚宮』第三章

クエネルの見方は幼い時分に学校と寄宿舎で何年も起居をともし、同じ大学で学んで、彼の人柄に身近で接したばかりでなく、バイロンをはじめいろいろな文学者の作品と生活の探求に努めて来た、このすぐれた伝記家の觀察として、興味深いものがある。

グリーン自身も別のところで次のように書いてい

一四歳の時、まるで天啓のように、私は殘酷の楽しさを悟った。もう野原の散歩や浜辺でのクリケット競技に興味を覚えなかった。すぐ近所に、私がなにか仕掛けてやりたと思った娘が下宿していた。私は彼女に会いたくて、その家の入口のあたりをぶらついた。実際にはなにも仕掛けたわけではなかった。まだそうするだけの年になつていなかった、しかし私は嬉しかった、苦痛というものが、恐ろしいものでなくて、好ましいものだと思えることができた。まるで、人生を楽しむ方法は苦痛を味わうことだと思つたみたいだった。『地図のない旅』第一部第二章

この二つの引用文を読むと、クエネルはみごとにグリーンの眞の姿を捉えたかのようにであるが、必ずしもそうではない。彼はグリーンの中には、その当時も今も、彼の自伝的文章に示されていない、もっと明るい、いたずらっぽい面があることと、そういう一面がグリーンのその後の巧妙な小説の背後にひそんでいるのではないか、といっているのである。クエネルからの引用の最後にいわれていることは、グリーンの最近の作品、例えば短編集『御亭主をちよつと拝借』その他性生活にまつわる喜劇『*May We Borrow Your Husband?* and Other Comedies of the Sexual Life,

1967) などについては、たしかにクエネルのいうような、鬼面人をおどす底^{てい}のものがあると思うが、今引用した、グリーンのいう「残酷の楽しさ」についてはどうだろうか？ この引用文は、グリーンが暗黒大陸アフリカの奥地^{おくち}への旅によって、人間の内面にある暗黒を探索しようとして、自分の記憶に残っている、もっとも幼い頃からの、「暗黒を示唆する」体験を述べている個所の一部である。彼のいう「残酷の楽しさ」、「人生を楽しむために」、「苦痛を味わうこと」とはどのような意味であるか、なかなか理解しがたいし、ことにこの体験が性的なものに結びついていることは確かであろうが、しかし、グリーンがすでに学校という小さな世界を通じて直観したように、人生が一種の地獄であり、人間にとって残酷、苦痛が避けがたいものであるなら、人はすべて、なんらかの仕方での「破壊的要素」(コンラッド『ロード・ジム』第二〇章)に身を浸し、その苦痛を満喫することによって、逆に生きる道を発見しなければならぬのではないか。そしてグリーンの小説はすべて、こういう苦痛を味わう試みであったということができる。

「地獄」と「天国」の発見

この発見はグリーンの子供時代環境と深い関係を持っている。前に書いたように、彼の住居は学校の構内にあつて、家庭と学校とはドア一つを境にして、すぐ接し合っていた。片方は平和と愛に満ちた家庭、他方は学校の地獄という、いわば、まったく種類を異にする二つの異国の境界に彼は住んでいたのだった。このことが彼の思想と感情の形成に決定的な影響を与えることになった。一三歳の少年グリーンは(たぶんそうだったろうと後年彼は書いている)、土曜日の夜、学校オーケストラの演奏するメンデルスゾンの曲をうしろに聞きながら、学校と反対側の、家のほうへ逃れ出て、暗闇の中のクロッキー競技用の芝生にたたずみ、近くで兎が草をはんでいるのを耳にしつつ、うしろを振り返る。

それは解放のひとときであつた——祈りのひとときでもあつた。人は激しく神を意識した——時は停止した——音楽が空中に漂う、今はどんなことでも起こり得るだろう、

国境の向こうの群集に仲間入りしなければならぬ、その時までは。どこにも必然性などはなかった……信仰は山を動かすほど大きかった……巨大な校舎が闇の中でゆらいだ。

かくて信仰が人を訪れた——形もなく教理もなく、それはクロッキーの芝生の上に現前するものであった。そこは道向きの暴力、残虐、悪と結びついたものであった。人は地獄を信ずるが故に天国を信じ始めた。しかし、その後まだ長らく、心にはつきり思い描き得るのは地獄だけであった。

『掟なき道』『プロローグ』

こうして、地獄そのものによって天国が可能となった。少年グリーンにおいてはばかりでなく、彼の後年の作品においても、神や善は、つねに罪や悪に対する強烈な意識によってのみ発見される。人間の現実の惨めさを直視しての不安な自意識、救いへのもつとも緊張した主体的関心がそれを行なわしめるのである。悪を通じて天国を発見するということは奇怪な感じを与えるかも知れない。しかし、このような仕方によらなければならなかったのは、グリーンだけの宿命ではなかった。例えば、人間の卑少さにおいて神を、神において人間の偉大さという仕方で、人間救済の真理を探求したパスカルがいる。『グレアム・グリーン——悲

劇的時代の証人』(Graham Greene: témoin des temps tragiques, 1949) の著者ポール・ロステンヌ (Paul Rostenne) は、近代文明の一切の社会悪・政治悪に追いつめられた人間の内面性の中に、グリーン的な「地獄」の悪に対する意識が生まれて来た点を指摘して、次のように言っている。「二〇世紀の精神的ダイアグラムはサタンへの回帰の仲介者によって神へ回帰しようとする曲線をますますはつきりと描き出している。そして、あらゆる宗教的分解過程——たとえば合理主義的プロテスタンティズム——において、まず第一に消滅させられるのが悪魔への信仰であるのを見る時、人はサタンに対する認識が神に対する認識の序曲をなしていることにおどろいてはならぬ」(ロステンヌ上記書、三五ページ)

少年グリーンのこういう「地獄」と「天国」の発見は、その後、イギリスの国教の信仰からローマン・カトリシズムの教義の承認へ^{たど}りつくことになるし、さらに後に至っては『ブライトン・ロック』(Brighton Rock) から『情事の終り』(The End of the Affair) までの小説における神発見へと発展することになる。そ